

雪国文化【雪国の暮らし】

十日町（とおかまち）市は「雪国」として知られる山岳丘陵地帯にある。この地域の年間積雪量は平均 2 メートルであるが、特に過酷な冬には 4 メートルもの雪が積もったことがあり、最長で半年間それが続くこともある。その結果、季節の変化は十日町の生活の流れの中心となる。住民は、夏の間には農作業を行い、冬のための食糧を保存するので多忙である。そして秋に収穫が終わると、地元の薬湯を定期的に訪れ、長い冬を前に活力を取り戻す。

十日町の歴史の大半、人々は豪雪のために毎年数か月もの間、家に閉じ込められてきた。男性たちが雪かきにいとせしみ、農作業が休止になっているこの間を利用して、十日町の女性たちは織機を持ち出した。十日町は、カラムシと呼ばれるイラクサの一種から紡がれた糸で織られた織物・越後縮（えちごぢぢみ）生産発祥の地として知られている。冬の中では日照時間が最も長い 2 月から 3 月には、この織物は数日間雪の上に晒され、太陽によって白く漂白される。

江戸時代（1603～1867）には、毎月 10 日、20 日、30 日に町で市場が開かれ、この伝統から町に「十日町」という名前が付けられた。この市場は、収穫物や、冬に作った手作りの民芸品や織物を売りに来る周囲の農村に住む人々にとって極めて重要であった。